たのしい心に残る介護詩

テーマ

【さくら】

季節外れのコロナクラスタ　いつの間にか
桜は散った　みんなでお花見来年こそは

◉選者・今月のテーマに寄せて

近所のしだれ桜は切り取られ、ソメイヨシノの爺様宅はコロナ禍のためにお花見を3年中止し、八重桜の婆様は施設へ入所。
今年こそはみんなでお花見をしようと思っていたら、コロナクラスタが発生し、2週間営業縮小になってしまいました。お年寄りもスタッフも家族も皆さん無事でよかったので贅沢はいいませんが、いつの間にか散っていた葉桜を見てたら悲しくなってきて、この詩が生まれました。
5月から5類に変わりますが、さあどうなることやら。せめて一緒に働いてくれたスタッフの送別会や、入ったばかりのスタッフの歓迎会など、通過儀礼をしてあげたいです。以上、コロナクラスタで関係者にお詫びの電話をしまくって病みそうな小林からでした。

（編集部㊟：4月初旬記）

【昼寝】小林敏志選

NO.1 SPECIAL SELECT

桜肉の　効き目の蘊蓄（うんちく）　肥後のデイ

――微女（看護師）

ワシの歳　さくらの木より　若かった

――笠倉一也（介護職）

昨年も　今年も見れた　さくらかな

――笠倉一也（介護職）

さくらより　重要なのは　お便所よ

――笠倉一也（介護職）

御座敷いて　さくらの木の下　ころがった

――笠倉一也（介護職）

桜待つ　ババ7並（しちなら）べ　して遊ぶ

――おちょっ介（介護職）

デイ送迎　桜の開花を　ババに告げ

――おちょっ介（介護職）

選者評

地域性溢れる熊本のデイならではの介護詩で素敵です。桜を桜肉に変換もお見事。はいこんちょがある栃木では、毎年お年寄りに教わってシモツカレという食べ物を、初午の日に作って食べてます。郷土料理など地域色が出まくってる介護事業所が増えたらいいな。知り合いの山梨のデイの管理者は、鉄砲撃ちで、デイで熊肉の解体してるらしいです（笑）

ババはババ　桜咲こうと　咲くまいと
——おちょっ介（介護職）

4年ぶり　マスクの花見で　七分咲
——藤脇　聡（医師）

さくら散る　花びらとともに　マスク舞う
——藤脇　聡（医師）

さくら散り　わしゃもうダメじゃと　嘆く爺
——藤脇　聡（医師）

葉桜に　今季のわしじゃと　イキる爺
——藤脇　聡（医師）

「サクラサク」　吉報を待つ　ばあちゃん家
——微女（看護師）

さくら茶を　飲んだばかりに　あの苦労と
——大西三等歌（介護職）

今年もまた　見られましたと　手を合わす
——ほじほじ（介護職）

逝く人の　桜吹雪と　御所車
——つや姫（介護職）

散るさくら　風にまいまい　春おしむ

【フリー部門】小林敏志選

Good! SPECIAL SELECT

呆けてなお　子を傷つける　親ありて
——ほじほじ（介護職）

たむろして　『女性セブン』を読む　バッチャ
——でいどりいむ（介護職）

リハパンの　ポリマーぜ～んぶ　出すバッチャ
——でいどりいむ（介護職）

元気になると　ジロリと睨む（にら）　ジッチャ
——でいどりいむ（介護職）

お通じは　日々の介護の　通信簿
——藤脇　聡（医師）

面会に　板やビニール　邪魔なだけ
——藤脇　聡（医師）

ジビエです　ぼたんにもみじ　さくら肉
——微女（看護師）

ほっぺたが　桜色（さくら）に染まった　りんごっ娘
——微女（看護師）

桜餅　葉に軍配と　源爺は
——微女（看護師）

子の巣立ち　婆の入所の　春寂し
——大西三等歌（介護職）

この世から　戦いなくして　いつの日か
——つや姫（介護職）

もくれんの　白にみせられ　春の日に
——つや姫（介護職）

花嫁の　孫にとどけて　この思い
——つや姫（介護職）

選者評

認知症になっても、100歳になっても、築いてきた親子関係は変わらないですもんねえ。スタッフにもよく会議で話しますが、僕らの介護を息子さんや娘さんに押しつけちゃダメだよねって。その家族その親子にしかわからない歴史や文脈があるから、そこを想像しながら介護をつくっていかないと、正しさで傷つけてしまう。20年介護やっていても、お年寄り一人ひとり生活背景は全部違うのですごく難しいですが、だからこそやり甲斐もあります。他人だからこそできる介護がある。そんなふうに思えるようになってきました。

小林さんには投稿者のお名前を伏せて選考していただいています。（編集部）